

SDGsにおいて大学に期待される役割

2021年3月5日

東京大学未来ビジョン研究センター

大 竹 暁

SGUとSDGs

- SGUは「大学の国際化」を目指しているが、状況は大きく変化している。
- COVID-19により、遠隔授業や在宅措置で、世界の大学経営は大きな変容に迫られている。
 - これまで一つのモデルとされていたアメリカの大学の経営手法、つまり著名教授陣と整備されたキャンパスに国内の優秀な学生と世界からの留学生を物理的に集め、その効果を国際評価につなげ、さらに優秀な人材と資金を集めるモデルの座礁
- COVID-19に代表される地球規模課題に対応することを新たな評価軸に出来る。
 - 市場ではESG投資の動きがある。

可能性を秘めた大学の機能

●大学の大きな役割

1. 教育: 将来を担う人材の育成
2. 研究: 多様な課題を対象とし、様々な成果を生む可能性
3. (地域)社会で重要な役割を担う機関:

産業界、国や公共団体・機関、人々との協力、連携、共創

●SDGsは若い世代、科学技術・イノベーション、社会との協働に共通する大きな課題。



大学はSDGsの実現に向けて大きな潜在性を秘めている。

SDGsの重要要素

- GSDR2019が重要要素は、
 1. 将来の世代の幸福の基本的な要件を確保すること
 2. 持続可能な開発の経済的、環境的、社会的側面のバランスをとること
 3. 誰も置き去りにしないこと
- しかし、いずれも実現には大きなリスクを抱える。
- 第一は、SDGsの成否は未来世代に関わることで、現在の若者の考えが重要。
- 第二は、これまでの成功物語とは異なるシナリオの必要性
- 第三は、社会や世界によく目を配り、知ること。
- SDGsに掲げられた課題は火急の対応を必要としている

若い世代はSDGsのような地球規模課題に関心大

国連で次世代の一人として地球環境問題を訴えたスウェーデンの高校生
グレータ・トゥーンベリさん

ガーナにチョコレート工場を作った
大学生 田中 愛さん

ガーナのカカオ農家の栽培法の改善、ガーナ政府と適正価格でのカカオ買い上げを交渉、クラウドファンディングなどでガーナにチョコレート工場を建設

1年の半分はガーナに滞在
(2021年2月11日付 朝日新聞)

SDGsと若者

- 地球の限界、成長の限界が見えつつも、世界全体で貧困は減少。一方、格差は拡大。
- 情報が即座に共有される今日、これまでの成功のモデル(リニアモデル、トリクルダウンなど)はもはや現実的でない。
- このような状況の下で、若い世代は上の年代とは違う価値観を持っている。
 - 決まった安定より、予想外の発展の可能性
 - 中流意識より、個性的な生き方への憧れ
 - 物質的豊かさ、大量消費より精神的豊かさ、「程よく」
- 環境問題を含む地球規模問題への関心の強さ

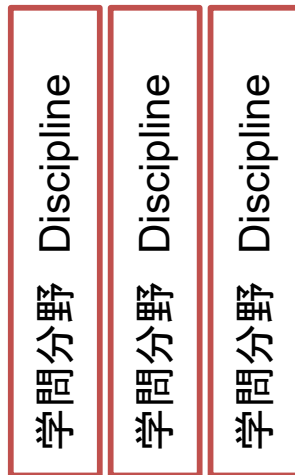
教育：SDGsなどの地球規模課題に敏感な若者への応答

- 日本は持続可能な開発の教育（ESD）にはかなり積極的な取組
- ESDは初等中等教育（小学校、中学校が中心）
- いくつかのギャップ
 1. 大学受験に向けての高校から大学
→ESDのような「受験のツボ」にならないものには時間が割かれない。
 2. 確立された学問分野（Disciplines）と地球規模課題に応じる新しい学問、例えば持続可能な科学（Sustainability Science）との乖離
 3. 若者世代とシニア世代の年代の価値観の差。
→大学での教育環境が将来世界が求めるものに変容する必要性。

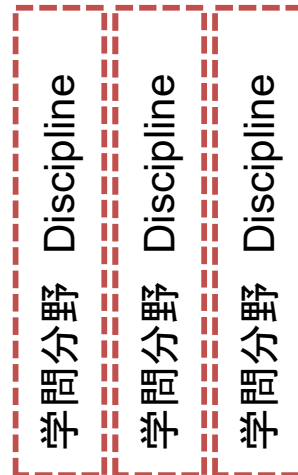
学際性について Discipline



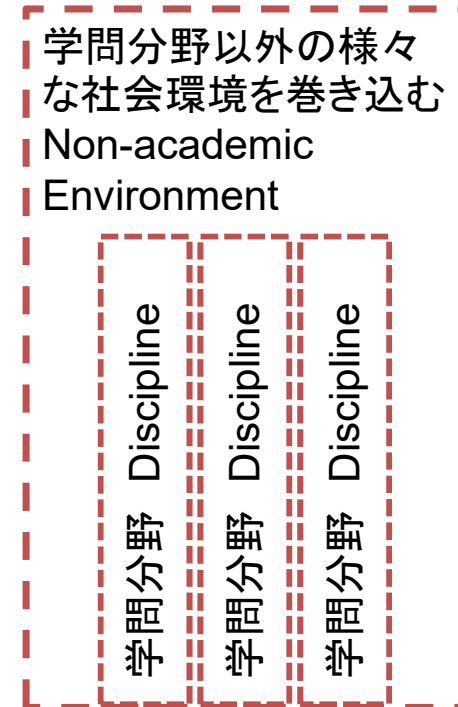
単一分野
Mono
Discipline



多分野
Multi-
Discipline



学際
Interdiscipline



超学際
Transdiscipline

Bunders et al (2009) からISSCが作成したものを編集

研究：知識の宝庫としての解決策への貢献

- 当面の行動：既存の課題と既存の解決策のマッチング：**再認識**

(10人委員会共同議長STI Forumの結論)

科学が問題を解決できることを示して、社会の信頼につながる。

- 目標間の関係性(Nexus)を様々に見直して”Planetary Boundary”を緩和できる努力をする：**協働・越境**

(例)都市問題と食糧、水、エネルギーのNexusでは、それぞれを最大化はできないが、食料の地産地消や水のリサイクルなどで、我慢を軽減できる。SynergyとTrade off

- さらに、破壊的なイノベーションを追求する。ただし、これは計画することは難しく、セレンディピティにもよる地道な取り組みが重要：**創造**

→ **再認識、協働・越境、創造を個人、組織の中でバランスさせる。**

SDGsを巡る(日本の科学界の)3つの勘違い

SDGsについて、日本の科学界では3つの勘違いがある模様

- SDGsは開発途上国中心のもので、ODAに関わるものだ。
 - SDGsは地球環境問題に限られた課題だ。
 - SDGsは科学と関係ない。
- だから、自分の研究とは関わりはなく、関心を持たない。
- この勘違いを早く払拭する必要がある。

社会の中での大学の役割の増大

- 出口からの発想
- 論文でとどまらずその先の一步をいかに進めるか
- ただし、全てを自らはできないので、様々なプレイヤーとの協力
- 共同研究から社会実装に向けて
- 研究者だけではなく、起業者の育成を
- それらを通して、学問に加えて社会的な価値についての社会との信頼関係の構築

人材、知識、関係の宝庫、大学

- SDGsに代表される地球規模課題は人類の存続をかけた総力戦。
- これまでのやり方で資源(技術、資金、人)を使っても達成はできない。
- まずこれまでの人材、知識、関係を総動員し、組み合わせ、これまでより少しでも解決に向けることが急務。
- 人材の育成、価値観の涵養、関係の拡大
- その上で、新たな破壊的イノベーションも追い求める。
 - 例えば、太陽電池: 実用に耐える効率化
 - コンピューター: 量子技術によるエネルギーの省力化 など

東京大学での取り組みの例

東京大学 “未来社会協創推進本部(Future Society Initiative)”



2017年7月、東京大学は、総長を本部長とする「未来社会協創推進本部」を設置しました。その目的は、東京大学憲章に示した「世界の公共性に奉仕する大学」としての使命を踏まえ、地球と人類社会の未来への貢献に向けた協創を効果的に推進することです。



「未来社会協創推進本部」を設置しました。公共性に奉仕する大学としての使命を踏まえ、



<https://www.u-tokyo.ac.jp/adm/fsi/ja/index.html>

東京大学グローバル・コモンズ・センター

- 2020年、東京大学は未来ビジョン研究センターにグローバル・コモンズ・センターを発足させた。
- 20世紀半ば以降、人間が地球環境を支配する「人新世 (Anthropocene)」になり、安定した地球環境がバランスを崩し、人類社会は危機に瀕する可能性が高まっている。当センターは、地球という人類の共有財産 (Global Commons) の責任ある管理 (Global Commons Stewardship) に関する国際的に共有される知的枠組みの構築を進める。
- 第一段階 (2020-2022年度) の研究内容
 - Global Commons Stewardship Framework with Indexの開発
Global Commons 概念の研究、持続可能な人類社会実現のシナリオ経路、各国のGlobal Commons Stewardshipへの貢献を測定する指標の開発等
 - Circular Economyの実現と食料システムの転換を優先テーマに、社会・経済システム転換の具体的道筋の研究と実践